



安部公房『燃えつきた地図』論：流動する都市と失 踪者の孤独

長澤，拓哉

(Citation)

國文論叢, 56:45-59

(Issue Date)

2021-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81013022>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013022>



安部公房『燃えつきた地図』論

——流動する都市と失踪者の孤独——

長澤拓哉

一、はじめに

安部公房が一九六七年に発表した『燃えつきた地図』は、「失踪三部作」の第三部にあたる作品である。作者自身は本作について「一応三部作という形で、失踪前駆状態にある現代を書いてみました」と語っている¹⁾。言わば完結編となるこの作品と前二作との間にはしかし、大きな違いが認められる。『砂の女』で村に迷い込む仁木順平、『他人の顔』の顔を失ってしまった「ぼく」のように、前二作では失踪者が主人公とされていたが、『燃えつきた地図』の主人公である「ぼく」は失踪者ではない。根室波瑠に依頼されて失踪した彼女の夫である洋を追う探偵「ぼく」は、彼を追っていくうちに自身も失踪してしまう。すなわち、本作では失踪状態が前提として置かれるのではなく、失踪へと向かう過程が描かれているのである。

秋山駿は、作品刊行の直後に「この小説にある現実的なものの量は非常に寡く、「多くのものはほとんどその抽象的な平面上にある」のであって「本当に必要な現実的細部に乏しい」と評した²⁾。

以来、本作の舞台は専ら抽象的でアレゴリカルな空間として理解されてきた。たとえば前田愛は、「この風景はこれからはじまる捜索の原点であり、探偵自身が失踪者となる場所でもある。人間の方が架空の映像めいて見えるうつろな風景のありようは、失踪ないしはアイデンティティの喪失を予兆する暗喩なのである³⁾」と論じ、作品における「団地」という空間に注目を促しているが、あくまでもそれを「暗喩」として捉える解釈枠組は維持されている。

安部は、本書に寄せた「著者の言葉」として、「あえて希望を語りはしなかったが、しかし絶望を語ったわけでもない。おのれの地図を焼き捨てる、他人の砂漠に歩き出す以外には、もはやどんな出発も成り立ち得ない、都市の時代なのだから」と述べている。本稿では、この作品を条件づけるものが「都市の時代」というきわめて具体的なコンテキストであることに注目したい⁴⁾。冒頭の《調査依頼書》に記された日付によって、『燃えつきた地図』作中の時間は、発表と同じく一九六七年であると確定できる。波瀾剛は作中の「F町」が「府中市中河原町周辺（現在の南町、住吉町）」⁵⁾であること、また荏部直は根室波瑠の住む団地が「日本在宅公園が

開発した荻窪団地（現・杉並区荻窪三丁目）⁶）であることを調査によって明らかにした。舞台となる都市空間は、同時代の東京と具体的に重ね合わせる事が可能なものとして表象されている。

実際、一九六〇年代以降の安部公房は、磯崎新をはじめとする建築分野の人びとと深い関わりを結んでいた⁷。本論ではこの点に着目し、一九六〇年代の都市建築論、主にメタポリストの言説との相関性の中で本作に表象された都市空間の分析を行う。現実の都市を表象した作品の空間と「失踪」という事象との関係を明らかにすることで、変貌する戦後都市空間におけるコミュニケーションの在り方を「燃えつきた地図」がどのように示したのかを明らかにしたい。

二、流動する都市

急速に戦争の傷跡からの脱却が押し進められた高度成長期の日本の都市空間において、建築家たちが果たした役割は絶大である。一九六〇年代の都市建築の中でも強い存在感を放ったのが、川添登や黒川紀章を中心とする、「メタポリズム・グループ」である。彼らの思想は建築分野のみならず様々な同時代の文化領域へと波及した⁸。

メタポリストが提案したのは、都市を「新陳代謝」する空間、流動する空間として捉えることであった。黒川紀章は「もろもろの事象が激しく流動し、成長し、変貌し、増殖する」現代社会では、「都市そのものが本質的に変身するもの、新陳代謝するものとしてとらえられねばならない」と主張した⁹。また、彼らの発想に大きな影響を及ぼした丹下健三は、人、もの、意識や感情を含む

情報の「流れ」という空間的なカテゴリーをその都市論の核心に置いていた¹⁰。彼らの建築思想の根幹には、同時代の社会が「流れ」によって形成されており、したがって都市建築もまたそれに併せて流動するものでなければならないという発想があった。

このような認識は「燃えつきた地図」においても底流している。「ぼく」が調査のためにF町一丁目のM燃料店を訪れる場面の叙述を見てみよう。

「だって、あんた、二丁目の団地が完成してごらんよ、町に都市ガスが入ることは、こりゃもう、はっきりとした公約なんだから……こうして、町がどしどし発展して、ベッドタウンというのかな、そんなふうにくらんでくると、プロパン屋の財布も、いつしよにふくらんでくれるが、いずれ都市ガスが入って来て、それでパチン……店はひろげる、電話はふやす、店員も無理してかり集める、オート三輪だって、支店の分も入れりゃ、十台にもなったというしねえ……」

F町の描写に関しては、そこに地図（図1）が挿入されている



ことが読者の目を引く。波瀾剛は、この地図を「読者に対するメツセージ」として捉え、「郊外の変貌を強いることによって展開される都市化といった構図は、作品世界の内側にとどまらず、外側の読者によっても重要な前提とされている」と指摘している¹¹。都市の変貌は、同時代の読者にも強く意識されていた現象であった。

注目されるのは、地の文がそうした「変貌」を「ふくらんでく」という膨張のイメージによって描き出す点である。町は「二丁目の団地」という新たな建築物が建てられることで発展するが、一方でM燃料店のような「旧い町」に属するものはとってかわられる。ここでは都市が、身体のように新陳代謝する有機体として捉えられているのである。

本作における都市の描写には、同時代の都市言説との深い相関性が認められる。たとえばメタボリストたちは、新陳代謝する都市を支える重要なエレメントとして、「情報」に注目していた。本作の「ぼく」の妻は「いやにモダンなショーウィンドウ」を備えた洋裁店のオーナーとして独立しているが、彼女はその仕事について「宣伝なんていう、いちばん賑やかな表通りでの競争」と述べている。黒川は「消費者はものを買っているのではなく、それに付け加えられている情報価値、つまりデザインを買っている」のであり「ファッション・デザイン」は「情報価値がきわめて高いところと位置づけられる」とファッションが持つ情報価値としての側面に注目し¹²、「製品を売る」ことよりも「新しい情報を提供する」空間として都市におけるシヨールームの重要性を強調していた¹³。洋服を作ること、売ることにもまして、「宣伝」を重視する彼女の認識は、六〇年代の都市を「情報都市」と捉える黒

川紀章の認識に重なっている。

小田光雄が「ぼく」が訪れる団地が「交通の便の悪い郊外に位置している」ことに注目し「郊外社会と自動車社会が成立して行く過程を物語の視座としてその背景にすえているようにも思える」と指摘するように、本作で重要な役割を担うのが、自動車である。「ぼく」が波瑠の「弟」と初めて接触したのは、自動車においてであった。自動車は本作では、「ぼく」と他者を繋ぐと同時に情報をもたらすという重要な機能を担っている。同時代の都市の文脈でも、黒川紀章は「人間同士のコミュニケーションが情報と呼ばれるのと同じように、交通も人間自体の移動による、広い意味での情報技術と呼んでいい¹⁵」と情報都市における交通の重要性を指摘し、対話をはじめとする「情報都市の重要な機能」の要求に応えるものとして「自分一人の判断で自由に動ける自動車」の機能に着目していた¹⁶。

しかし、メタボリストが流動の肯定的な面を捉え、都市の新陳代謝を促進する立場を示したのに対し、『燃えつきた地図』は都市の流動の否定的な側面に光を当てている。「ぼく」が探偵業務の中で繰返し訪れる事になる団地がそのことを象徴する。

波瑠の暮らす団地の特徴は、何よりも他者を拒むその閉鎖性にある。「ぼく」が初めて団地を訪れた際の「まるでトンもありません重々しさで」「はじめに、二十度ばかり、つぎに六十度ばかりと、二回に分けて扉を開く」という対応に見られるように、波瑠は外から訪れた他者を容易に自身の領域内に立ち入らせようとはしない。「厚いわが家の壁を、さらに厚くて丈夫なものにするために、その壁の材料を仕入れに出掛けて行く」住人たちは、団地の

一室と外界との繋がりや遮断し内側へと閉じた空間を形成する。団地の閉鎖性は、そこでの住人の生活を画一化させる。彼らは「そっくり同じ人生の整理棚が」並んだ団地の生活において「自分で自分の見分けがつけば」十分だと感じているが、外部の存在である「ぼく」の眼には、その生活はこのように映る。

誰も付添い人のいない、赤い乳母車の中で、頭からシーツをかぶった赤ん坊が、金切り声をあげて泣いている。銀色に光る変速機つきの軽合金自転車に乗った少年が、わざとらしい高笑いを投げつけながら、寒さに頬を染めてその傍を駆けぬける。見れば、けっこう、人通りもあるのだが、あまりにも焦点のはるかなこの風景の中では、人間のほうがかえって、架空の映像のようだ。

団地での生活は、「ぼく」の眼を通して見れば、いずれも「架空の映像」のようにしか映らない画一的なものに過ぎない。「ぼく」が波瑠について「正面から顔を合わせたはずなのに」「いきなり、印象がぼやけてしま」ったと感じることは、彼女もまた「架空の映像」として団地の中に埋没していることを示している。外界との関係を遮断する団地において住人の生活はその内部で画一化され、彼らの主体は「団地の住人」という枠組みの中へと収斂されていく。団地は、外的刺激による変化を拒み、その内部で固定化されていく都市での生活を象徴する空間として表象されている⁽¹⁵⁾。

団地の固定性は「ぼく」の時間感覚に関わる問題として表れる。調査の過程で記す「報告書」の冒頭に必ず日時を示しているよう

に、「ぼく」は常に時間の流れを意識している。しかし、調査が進むにつれて調査書の日時が偽装されるなど、「ぼく」の時間感覚は徐々に狂い始める。《つばき》で襲撃された後、「ぼく」は団地を訪れるが、そのとき波瑠から告げられた残りの契約期間は「あと、五十八時間」であった。その後、気分が悪くなった「ぼく」を部屋に通した波瑠は「まだ三十四時間もある」と言い、さらにその後ベッドに横になった「ぼく」に対しては「五分前に契約が切れた」ことを告げている。こうして残りの契約期間であった五十八時間が過ぎてゆくが、「そんなに長い間寝ていたのかな？」と、この経過は「ぼく」自身の感覚とは一致していない。こうして「ぼく」は波瑠との関係を深めてゆくうちに、時間感覚を喪失してゆくのである。

「ぼく」の時間感覚に乱れが生じるのは、波瑠との関係を深めてゆく中で「ぼく」が埋没した団地という場所が、無時間的で固定化された空間だからである。記憶を失った「ぼく」が再び団地を訪れる場面は、この空間の無時間性をより明確に示している。

べつに真空の中に投げ出されたわけではなかった。真空どころか、巨大な、見わたすかぎりの団地だった。四階建の住宅群が、高台のくせに、暗い谷底に沈み、規則正しい光りの格子をくりひろげている。まさか、こんな風景があらわれようとは、想像もしていなかった。だが、その想像もしていなかったところが、問題なのだ。町は、空間的には、まぎれもなく存在していたが、時間的には、なんら真空と変らない。存在しているのに、存在していないというのは、なんという

恐ろしいことだろう。

「ぼく」が団地を前にして述べる「時間的には、なんら真空と変わらない」という言葉は、この建築空間の無時間性を端的に物語っている。そしてこのことを「ぼく」が「恐ろしい」と感受しているように、団地が持つ特性である固定性、無時間性には、明確に否定的な意味付けがなされている。これは「移り変え」の促進による住宅の「流通市場」の形成を提案した黒川のように、団地を含む住宅群もまた新陳代謝するものとしてその流動を肯定的に捉えるメタポリストの認識とは対照的である。

絶えず更新され続ける都市空間の裏には、新陳代謝の過程で切り捨てられていく無数の空間が存在している。槇文彦は、都市の新陳代謝について「新しい環境が都市に築かれて行くならばその空間はこうした変化に対し有機的な反応を示し得るものでなければならぬ。弾力性のあるものが発展し他は死滅して行く」と述べたが、ここで槇が述べるところの「死滅」した空間がメタポリストの都市建築論において議論や注目の対象となることはない。対して本作では「ぼく」がF町一丁目に「いずれ取り残され、置き忘れられていく、この古い町の運命」の「暗示」を見るように、新陳代謝の過程で「死滅」していく古い空間が可視化されている。「踏み荒らされ」「捨てられた」ものにあふれた「道路の死骸」を通して行き着く団地もやはり「死滅」した空間である。本作が表象するのはメタポリストが不可視化したような流動する都市空間の言わば裏面なのである。

三、都市の孤独

高度成長期の建築家らが課題としたのは、人間を主体とする共同体を形成することであった。黒川紀章は建築家に「人間の主体性に基づいた社会を築いていくという基本的な態度」を求め、槇文彦は「人と人、あるいは人との間のフィードバックが飛躍的に増大すること」あるいは「環境と人間とのかかわりあい方、相関関係が、より密接になること」を新たな「情報文明の時代」の本質として捉えた²¹。また、菊竹清訓は、都市計画の内部に自然発生的なものを組み込む「チャンネル開発方式」を提案している²²が、ここで「現代都市のもつ本質的矛盾である市民の主体性の喪失に対し、この理論はひとつの参加の方向を与えるものとして考えている」と、都市が人間を中心として設計されることの重要性を主張している。

このように六〇年代においてメタポリストは、人間を主体とする建築の必要性とそこでの人と人との繋がりの重要性を繰り返し説いた。安部が彼らと問題意識を同じくしていたことは、東京オリンピック後に著されたエッセイ「モスタワとニューヨーク」からも窺われる。

僕の印象では、あの焦燥感、都市計画のひずみだとか、立ちおくれたとか、交通難であるとか、そんな外的条件によるものではなく、やはり人間相互の関係が、複雑化、もしくは異常化したための、一種のいらだちであるように思われた。とにかく、人々は孤独であり、不信と孤立感とで、甲殻類の

ようになってしまっているのだ。それに加えて、これは異常な、不幸なことだという、病理学的自己診断が、さらにいっそう焦燥感にかり立てることになる。²⁴⁾

安部もまた、新たな都市空間のなかで新たな「人間相互の関係」が複雑化しつつあるという認識をメタポリストたちと共有していた。しかしそこに「いらだち」「孤独」「不信」あるいは「孤立感」を見て取るとき、都市における人間関係の変容に対する両者の意味づけには大きな隔たりが生じている。

人間の関係を建築思想上の主題とするメタポリストにとって、都市における「孤独」は何としても克服されなくてはならない最重要課題であった。黒川は「人間疎外の社会」である現代には「漠然と大きく、つかみどころのない社会と個人を結びつけるもの」が欠けていると述べ、「セミ・パブリック・スペース」をあらゆるところに広げていくことが、現代社会の疎外感を救ってくれることになる」と建築による疎外の克服を標榜した。²⁵⁾ また、菊竹は同時代の都市の「環境構造」について「全くコミュニティ環境をつくりだそうとはしていないか、故意に阻止しているかのいずれか」であると批判した。²⁶⁾ 丹下健三の都市建築も、やはり「支配的な空間」によって「その建物を利用する人々、即ち、それがなかったら別々のセルに孤立した孤独な群衆となってしまうたであろう人々を統合する」ものであった。²⁷⁾ 彼らは建築によってコミュニティ・シオン空間を構成し、人と人とを結びつけることで孤独や疎外の克服を目指したのである。人々はみな都市によって繋ぎ合わさるべきであり、それこそが六〇年代において主体的に都市社会を

構成していくために必要不可欠な条件だと考えられていた。

都市の孤独に対する安部公房の向き合い方は、彼らとは対照的である。「モスクワとニューヨーク」で群衆の孤独を指摘した安部は続けて「だが、人はそこで、孤独からのがれようとしてはならない」と主張する。「必要なのは、孤独からの回復ではなく、孤独を当然のものとみなして、それを進んで引き受け、未知の新たな通路を探索する精神なのではあるまいか」。²⁸⁾ このように述べる安部にとって、孤独は克服すべきものなどではない。むしろその状況を肯定することで、新たな「通路」、すなわちコミュニティ・シオンの在り方を探求することこそが重要なのだ、と安部は考えていた。

一九六六年に行われた三島由紀夫との対談の中で、安部は「二十世紀の主題」として「他人と対立する」存在としての「隣人思想」あるいは「共同体思想」を「いかに絶滅するかということ」を挙げた。²⁹⁾ また、同年のエッセイ「隣人を超えるもの」では「他者との直接的なコミュニケーションを回復してゆかないかぎりどうにもならない。隣人というものの枠のなかで隣人と隣人を仲良くさせようという、一種のナショナル・インテラレストによる仲介方法では、もう問題を解決できない段階にきている」と述べている。安部の認識によれば、孤独の克服とは隣人との繋がりの中に回復することではない。メタポリストが主張するような都市建築を「仲介」することで形成される隣人共同体的コミュニティ・シオンではなく、孤独を受け入れ「直接」に他人へと向うことこそが現代都市において求められるコミュニティ・シオンの在り方である、と安部は主張する。³⁰⁾ 黒川は「これからの社会における人間の精神的原点」の形として「都市の中で、人間が新しくつくり上げようと

している。ふるさとがある」と述べるが、安部にとってみれば、「郷土的連帯意識」の産物にほかならない。「ふるさと」など、真つ先に否定されなければならないものだった。

実際、「燃えつきた地図」の執筆に際して安部は「現代社会が複雑だから、人間が疎外されている、それを回復するのに、人間のつながりを回復しなくちゃいけない」という。そういう発想こそ、じつは非常にネガティブなものだ」と発言している。野村喬は本作について「現代がもたらした疎外を獲得すべき疎外に置き換ええずこと、そのための手段としての失踪者の軌跡を究明するために捧げられている」と指摘するが、「都市の孤独」を肯定する安部は、メタボリズムの発想とは逆の方向を向いていたのである。

四、探偵の眼

八束はじめが「方法論に強くこだわった運動」であることを指摘するように、メタボリズムの建築家たちはその都市計画において「理論」や「計画」を重視した。「都市をモデル化して捉えるということ自体に大きな関心」を寄せた彼らは、「古典的なプラトニックな建築家像、つまりライプニッツ以来の人間の思考のアルゴリズム化（モノドロジー）ともクロスする」と八束は述べているが、ここで指摘されている「モデル化」や「アルゴリズム化」は、都市の構成要素や市民の在り方を抽象化し、システムティックに捉える抽象的かつ巨視的な視点によってもたらされている。対して安部の都市認識は、都市の細部を穿つような実体的かつ微視的な視点に支えられている。たとえば『燃えつきた地図』についてのインタビューにおける次の発言を見てみよう。

人はふつう、世界をひとつの略図としてみている。あるいは、その世界の略図にいっぱい枝や葉をつけてみている。しかしそういうことをいっさい取払ってみても略図なんだ。ぼくは現実へ接近するための方法として略図でないものを書きたい。しかもSF的な方法ではなく、日常的な世界の事物を通してどこまでそれを展開できるか、と考えてきたわけです。

失踪者を追う探偵の行動が、日常的な平凡なものにすぎないという批評があつたけれども、ぼくにすれば、金を支払われているビジネスのワク内での、ありきたりの日常的行動に限定することで、どこまで略図でない、現実³⁸に接近できるか、ということが問題だった。だから、あの批評はあつたっていないという気がするんだ³⁸。

世界は「略図」として捉えようという安部の指摘は、同時代の建築論の言説と重なっている。しかし、安部の小説は、あらゆるものを捨象した「略図」などではなく、むしろ「日常」という枠組みを設定した上で「略図」には収まらないありのままの現実³⁹に接近しようとする。八束はメタボリズムの理論について「現実はそのように合理的には運ばない」と批判を加えているが、都市の現実³⁹に焦点を当てる本作もまたそうしたメタボリズム批判の文脈に位置付けることが可能なのではないか。

主人公である探偵は、都市の現実の内部を生きる存在である。千野帽子は本作の描写について「高度経済成長末期の日本を遊歩する単独者の息づかいを感じさせる」と述べるが、「ぼく」は「下

水の清掃人夫」のように「光の射さない汚物の中を、這いずりまわ」り「略図」によっては決して捉えられない「現実」の都市の細部を感じ、記述して行くのである。

「ぼく」と同じく「光の射さない汚物の中」に立つのが、売春の幹旋やM燃料店に対してゆすりを行っており、調査の過程で「ぼく」の前に繰返し現われる波瑠の「弟」である。彼との関係を通して「ぼく」は失踪者の実体とはじめて向きあうことになる。「ぼく」が「弟」に連れられて河原のマイクロバスを訪れる場面を見てみよう。河原への道中、「ぼく」は「堤防をへだてた、河原とは反対側の風景」に目を向ける。

これまでは、梨畠の土手にさえぎられて見えなかつたのだが、畠も、家も、林も、根こそぎめくり取られた、広大な裸の土地が、直径一メートルもありそうな巨大な照明燈で、三方から、まるで舞台のように明るく照らし出されている。右手、百メートルばかりのところに、作業事務所と、数棟の飯場が、光の積木のような活気をみなぎらせ、それこそ都会の模型のような賑わいだ。正面の丘に食い付いている、ブルドーザーや、リフトシヨベル……交錯する、キャタピラが刻んだ、紋様入りの縞……作業場と道路を結ぶダンブの道……

河原の向かいには、都市建築を行うために整備された「裸の土地」が見えている。「都市の模型」と喩えられるように、新たな都市空間を創造するこの工事現場は、新陳代謝の真っ只中にある。しかし、そこで働くのは、生活保護を受け取るために妻によって

「行方不明人調査願」が出された男のように、失踪者として都市から弾かれてしまった者たちである。「あんたは、ちゃんんと、ここにいろよなあ……そうとも、わしはここにいるよ……」と互いに存在を確かめ合わなければ、彼らは都市空間の中に自身を定位することができない。彼の役目はこの工事の完了と同時に終わってしまうのであり、新陳代謝がなされた後の都市空間に居場所はな

い。その後「弟」は、都市を巡る抗争によって殺害されてしまう。彼の葬式に現れた「大和奉仕団」は、家出少年たちによって構成されている。その組長として都市の裏側で暗躍してきた「弟」は、「他人の眼になつて見るつてのは、面白いものだ」と失踪者の視点から世界を捉えてきた。「ぼく」が「彼」の失踪に対しても、当然ぼくらとは全く違った視点をもっていたに違いない」と考えるように、「弟」は失踪という事象を異なつた視点から捉える可能性を「ぼく」に提示するのである。

「ぼく」が眼差しを注ぐ失踪者は、都市を生きる有象無象の群衆である。孤独な群衆は、飯場の男たちや家出少年のように目の届かない場所にのみ存在しているわけではない。黒川紀章は、「社会の中には人間が歩くという基本的な交通のネットワークがある。歩くというのは、人間を主体とした社会の基本的なコミュニケーションの手段である」と、「道」という空間に都市のコミュニケーションの発生を見ているが、都市を見据える「ぼく」という探偵のまなざしは、交通空間のなかにさえ存在する孤独な群衆を可視化する。以下は地下街の喫茶店で「ぼく」が広場に目を向けた際の叙述である。

重ねたまま、写真を裏返しにして伏せ、目を上げると、すぐ向うの広場の柱の陰に、中年の男がしゃがんで、ほんやりあたりを眺めている。外套の裾がタイルの床に触れて、折れまがっているが、そのまがりかたから見て、そう安物の生地ではなさそうだ。わきに置かれた皮の鞆は、ごく通常の勤め人であることを示している。コーヒーが、ガラス張りのテーブルの上に置かれ、ミルクの壺の下に伝票が敷き込まれる。柱の陰の中年男は、不規則に、しかし絶え間なく動きつづける周囲の群衆を、まるで風景でも眺めるような、焦点のない視線で追いつづけている。誰か特定の人物を探しているふうでもなく、また探し出されるのを待っている様子でもない。その位置に、その姿勢で似合うのは、せいぜい途方にくれた浮浪者くらいのものであろう。そこは完全に、ただ歩くためだけの場所なのである。掏摸や、刑事や、カメラマンなど以外の人間にとつては、いわば存在しない虚の世界なのだ。見れば見るほど、理解しがたい、不自然な行為である。しかし、通行人には、その奇妙な男も、さして気にはならないらしい。床のタイル模様と同じく、一と足ごとに消えていく、空間の一部としか映らないせいであろうか。

「柱の陰」の男は、そこを歩く群衆のなかでほとんど不可視の存在と化している。彼の姿はただ「空間の一部としか映ら」ず、いずれ都市の新陳代謝の中で忘れ去られてしまう存在に過ぎない。「虚の世界」に佇む「柱の陰」の男は、失踪者と全く等価な存在であり、彼のような存在を可視化しうるのは「掏摸や、刑事や、カ

メラマン」あるいは、「探偵」のような、都市の細部を見とおす目を持った者たちだけである。

このように『燃えつきた地図』は、孤独な群衆たちのひしめく場として都市を記述している。そしてそれは、同時代の建築言説が抑圧した要素であった。例えば横文彦は「未来都市の都市人」を「理想的にはより高い教育と、より多くの自由度と、自我の拡張、そしてその必然的結果として、より多くの選択の自由度に対する欲求をもった人びとの集団」と、高度な合理性を備えた市民を想定する。菊竹清訓も同様に、都市における市民を「高い教育をうけた有能な知的水準の高い人たち」と想定し、「都市において、価値ある情報を持つて動きまわり、情報生産していく人間こそ重要であり、そういう人間が快適に暮らす環境というものがとても重要である」と述べる^⑬。しかし、都市に存在するのは知と情報に媒介されたそうした理想的市民だけではない。『燃えつきた地図』の「ぼく」が探偵として光を当てるのは、彼らの想定を逸脱する群衆の姿である。

飯場の人々や家出少年、道を歩く群衆、さらには一見連帯を形成しているかに見える会社のような疑似共同体の成員にいたるまで、微細な眼で都市を見据えればそこには多くの失踪者と化した孤独な群衆が存在している。安部が六〇年代の都市に見出したのは、彼ら有象無象の孤独であり、それを可視化する探偵の眼とは、すなわち小説家の眼にはかならない。『燃えつきた地図』は、建築家たちが「市民」の名の下に不可視化した孤独な都市生活者の姿を、小説家の眼によって微細に可視化するのである。

五、おわりに

小説家・安部公房は『燃えつきた地図』において、流動する都市の中で死滅して行く空間に目を向け、そこに存在する孤独な群衆に光を当てた。孤独や疎外状況からの回復ではなく、むしろそれを享受することを主張する安部は、本作において、都市の内部で他者と直接的にコミュニケーションする方法として「失踪」という現象を捉え直している。

存在への疑念によって失踪前駆状態に陥った者たちは、他者との繋がりの不可能性に行き当ることで失踪へと導かれる。「ぼく」と同じく作中で失踪する、大燃商事で洋の部下であった田代は、こう語っていた。

ぼくはね、朝の満員電車の中で、漬け物みたいにぎゅうぎゅう詰めになっているとき、すごく恐ろしくなることがあるんですよ。ふだん、顔見知りの、何人か、何十人か、何百人かとの付き合いだけで、世間の中に、ちゃんと自分の居場所を持っているようなつもりになっているけど、もっと身近に、こんなにぎっしりぼくを取りまいてる人間が、ぜんぶ赤の他人で、しかもその他人のほうが、はるかに大勢なんですよ。

田代は、少数の「顔見知り」との付き合い、すなわち「隣人共同体」的関係の中で自己の存在を支えようとすることに疑いを持ち、やがて自殺する。安部が都市の自殺者について「単なる敗者」などではなく、「一見都市の陽気を支えているように見える、雑多

な疑似共同体の虚妄を見抜いてしまった」ことに「失望」した者たちであると述べるように、田代の自殺もやはり都市への「失望」に起因している。ここに見られるのは、「赤の他人」にとりかこまれた都市空間における共同性は疑似的なものにすぎず、そこで感じられる連帯は「虚妄」に過ぎないという認識である。都市の内部に無数に存在している「他人」に直面したとき、田代は彼らと自身の間に「交通」が成立していないことを認識し、自殺によって存在の自己確認を成し遂げるのである。

都市開発の一端を担う大燃商事を訪れた「ぼく」は、その一室が「北部、北西部、西部と、郊外を三つに分けたそれぞれの巨大な手製の地図で埋めつくされ」ているのを見る。地図は絶えず更新され、その過程で多くの空間や市民を捨棄していく。地図をたよりにF町三丁目を訪れた「ぼく」は「私の地図（前年度発行）に出ているF町には、そんな丁目の区別などないし、道路の位置関係なども、かなりの相違が感じられる」と述べるが、これはわずか一年で大きな変貌を見せる都市において、地図がその過程で「死滅」した空間を完全に消去したことを示している。都市建築において用いられる地図は、本作が描くような孤独な群衆の姿を不可視化してしまう。だからこそ安部は小説家として既存の地図を捨て、都市の現実を捉える新たな眼を獲得することを主張するのである。

本作のラストシーンで、記憶を失い都市を彷徨う「ぼく」は、彼を探しにやって来た女から身を隠す。

ぼくは女を観察しながら、身をひそめつつづける。女は落着

かぬげに、空の方まで目をやって、探し求める。食いしばつた歯で、悲鳴を噛み殺しながら、ぼくはじつと耐えつづける。探し出されたところで、なんの解決にもなりはしないのだ。今ぼくに必要なのは、自分で選んだ世界。自分の意志で選んだ、自分の世界でなければならぬのだ。彼女は探し求める。ぼくは身をひそめつづける。やがて、彼女は、あきらめたように、のろのろと歩きはじめ、たちまち車の陰にさえぎられて、もう見えない。ぼくも、闇の隙間から出て、彼女とは反対の方角に歩き出す。理解出来ない地図をたよりに、歩き出す。もしかすると、彼女のところに辿り着くために……彼女とは反対の方角に、歩き出す。

「なんだ、あなたなのね」という電話での応答に見られるように、女は「ぼく」と親しい関係にある人物である。彼女と元の関係に戻ることは隣人共同体への回帰に他ならず、そこで形成される関係は欺瞞である。彼女に探し出されることは「ぼく」として「何の解決にもなりはしない」のであり、だからこそ「ぼく」は「自分の意志で選んだ、自分の世界」を求めて都市の中に失踪する。安部は「ぼく」について「特に能動的な失踪者でもないし、特に受動的な失踪者でもない」と述べているが、作品の結末部で「ぼく」は自身の意志で失踪を選び、「自分の世界」へと向かうことを能動的に選択するのである。

しかし「ぼく」は、洋や田代のように、都市における連帯の虚妄に行き当たったわけではない。彼を失踪へと導く自己喪失は、『つばき』で襲撃された結果陥った「記憶喪失」によって引き起こさ

れたものである。失踪者を追う過程で「ぼく」もまた自身の存在に對して少しずつ疑いを持ち始めるが、最終的に彼を失踪へと導くのはむしろ外的な要因である。安部は「帰るといふことと、逃げるといふことは、結局意識の中で裏返しになっているだけで、同じことになっている」と述べているが、結末部における「ぼく」の失踪は能動的な選択でありながら、あたかもメビウスの輪のように受動的な回帰へと裏返る。

ラストシーンで「ぼく」は猫の死骸に「名前をつけてやろう」とする。「小説は、都会、この名前の与えられていないものの満ちた世界で、どうやって固有名詞のないものの有効性、ルールをつかむかという問いかけ」であるといふ安部の主張とは裏腹に⁽⁴⁷⁾、この行為は、主人公が固有名のある世界への回帰を欲望していることを示している。さらに、「ぼく」は「理解出来ない地図をたよりに、歩き出」そうとする。安部は「おのれの地図を焼き捨てて、他人の砂漠に歩き出す以外には、もはやどんな出発も成り立ち得ない」と語るが、「ぼく」はそれがたとえ「理解できない」ものであるとしても、未だ自身の地図を捨て去ってはいない。

本作のラストシーンで「ぼく」は「彼女とは反対の方角に歩き出」しながら「彼女のところに辿り着く」ことを志向している。都市空間が形成する共同体の内部では、隣人的関係へと収斂されてしまい、個としての「彼女」の存在に到達することはできない。だからこそ「ぼく」は、失踪することで既存の共同体に捕われることのない「自分の世界」に自己を定位し、「他者」としての「彼女」との間に関係性を構築しようとする。このとき「ぼく」の失踪という行為は、隣人共同体的連帯を脱構築し、「他者」の連帯へ

と都市を再構築することの可能性へと繋がっている。しかし、猫の死骸に「名前をつけてやろう」とし、「理解出来ない地図をたよりに、歩き出そうとする「ぼく」は、既存の共同体の枠組みを越えてはいない。作品はこうして、主人公の「ぼく」を都市の共同体の内部に封じ込め、彼が他者へと到達する道をあえて閉ざしている。こうして「ぼく」の失踪は、「逃げる」と同時に「彼女のもとへ帰る」という両義性を帯びるのである。

六〇年代の都市論においてメタポリストラ建築家たちが重視したのは共同空間によって都市の連帯を形成することであった。彼らは都市における孤独を回復すべきものと考えたが、その認識枠組は孤独な群衆の姿を不可視化した。『燃えつきた地図』が光を当てたのは、同時代の都市論が不可視化した空間であり、そこに存在する孤独な群衆の姿である。本作には、同時代の都市論が死角に入れた都市の裏側を描くことで六〇年代の都市空間の在り方を明らかにしようとした安部の試みを見ることができるのである。

※本文の引用はすべて初刊本『燃えつきた地図』（新潮社、一九六七・一九九二）を底本とする『安部公房全集』第21巻、新潮社、一九九九・六）に拠った。

注

- (1) 安部公房「私の文学を語る」(『三田文学』三田文学会、一九六八・四) ↓ 『安部公房全集』第21巻、新潮社、一九九九・六)
- (2) 秋山駿「想像力はひび割れる——安部公房『燃えつきた地図』」(『文学界』文藝春秋社、一九六八・一) ↓ 『作家論』第三文明社、一

九七三、157頁)

- (3) 前田愛「空間の文学——都市と内向の世代」(『文学界』一九七九・九) ↓ 『都市空間の中の文学』筑摩書房、一九九二・八、563頁)

- (4) 安部公房「著者の言葉——『燃えつきた地図』」(安部公房『燃えつきた地図』新潮社、一九六七・九) ↓ 『安部公房全集』第21巻、新潮社、一九九六・六、312頁)

- (5) 波瀾剛「安部公房『燃えつきた地図』論——作品内の読者、小説の読者、および同時代の読者をめぐって」(『文学研究論集』14、筑波大学比較・理論文学会、一九九七・三)

- (6) 荻部直「安部公房の都市」講談社、二〇一二・二、49頁

- (7) 筆者は拙稿「安部公房『他人の顔』論——都市の表象」(『阪神近代文学研究』20号、阪神近代文学会、二〇一九・五)において、安部公房とメタポリストが実際の議論の場を持っており、言説上の重なりが見られることを確認している。

- (8) メタポリズムが影響関係を持った文化領域の一つが未来学である。小松左京を中心とする一九六七年の「未来学研究会」発足に川添登、翌年の「日本未来学会」創設に丹下健三と浅田孝が発起人として携わっている。当時「科学技術の急速な進歩を目にしている文化人にとって、自然と人間、文明と人間の関係、今後の日本に起こる変化は切実な問題だった」のであり、「小松は『未来学』をそれらの問題を究明する「ツール」として提唱した」(徐翌「小松左京と日本未来学…SFと並走する『未来』」(『海港都市研究』12号、二〇一七・三、49頁)。日本の「変化」に注目する小松の視点や、梅棹が一九六三年に「情報産業論」(『中央公論』中央公論社)を発表したことに示される「情報」への関心など、未来学とメタポリズムの間には相互連関的な影響関係を見ることが可

能である。

- (9) 黒川紀章『ホモ・モーペンス―都市と人間の未来』中央公論社、一九六九・九↓『黒川紀章著作集1 評論・思想I』勉誠出版、二〇〇六・一一、14頁
- (10) 八束はじめ『メタボリズム・ネクサス』オーム社、二〇一一・四、378頁
- (11) 波瀆剛『安部公房『燃えつきた地図』論―作品内の読者、小説の読者、および同時代の読者をめぐって』前掲
- (12) 黒川紀章『情報列島日本の将来』第三文明社、一九七二・九↓『黒川紀章著作集1 評論・思想I』勉誠出版、二〇〇六・一一、282-283頁
- (13) 黒川紀章『都市学入門―この東京、この列島を蘇生させる術』祥伝社、一九七三・八↓『黒川紀章著作集9 都市論I』勉誠出版、二〇〇六・一一、323-324頁
- (14) 小田光雄『郊外』の誕生と死』青弓社、一九九七・九、166頁
- (15) 黒川紀章『情報列島日本の将来』前掲、298-299頁
- (16) 黒川紀章『都市と自動車』(『サンケイ新聞』一九六七・一〇・一二)『黒川紀章著作集10 都市論II』勉誠出版、二〇〇六・一一、480頁
- (17) 環境の内部における画一化は日本の都市に限定的な現象ではない。デイヴィット・リースマンは一九五〇年に発表した『孤独な群衆』(加藤秀俊訳、みすず書房、一九六四・二、258頁)の中で同時代のアメリカ人の性格類型を伝統指向型・内部指向型・他人指向型の3つに分類し、その上で他人指向型の中でも「適応型の人間」について「自分がたまたま住んでいる近所の仲間集団だの、職業上の仲間だの、同じ社会階層に属する人びとだの

とどまり続けるかぎり、かれは自分自身についての自分のイメージと他人についてのイメージとの間にはなんらのくいちがいを感じないようになってしまうだろう」と自己と他者の間の差異の消失が見られることを指摘している。

- (18) 黒川紀章『私ならこうする』(『朝日新聞』一九七〇・八・一八)↓『黒川紀章著作集10 都市論II』勉誠出版、二〇〇六・一一、415頁
- (19) 横文彦『都市と人間』(『現代日本建築家全集』19、三二書房、一九七二・二、202頁)
- (20) 黒川紀章『多重構造の社会システム』(『境界領域への挑戦』講談社、一九七〇)↓『黒川紀章著作集10 都市論II』勉誠出版、二〇〇六・一一、184頁
- (21) 横文彦『都市と人間』前掲、191頁
- (22) チャンネル開発方式について、菊竹は「都市デザインの方法論」(『新建築』一九六六・四)↓菊竹清訓『人間の都市』井上書院、一九七〇・九、167頁)の中で「部分から全体に拡大するというシステムが、一つの基本原理となっている。そして計画の内部に不確定的要素、すなわち自然発生要素を組み込んでいる。つまり自発性を内在させている。これまで自然発生は計画に従属する概念であった。しかし、本来自発性は計画を支えるものであり、計画を推進させるものである」と述べている。
- (23) 菊竹清訓『都市デザインの方法論』(『新建築』一九六六・四)↓菊竹清訓『人間の都市』井上書院、一九七〇・九、167頁
- (24) 安部公房『モスクワとニューヨーク』(『東京新聞』夕刊、一九六四・一一・二六)二七↓『安部公房全集』第19巻、新潮社、一九九・四、58-60頁
- (25) 黒川紀章『ゆずり合いの空間』(『週刊読売』一九七三・一・一

- 三↓『黒川紀章著作集10 都市論Ⅱ』勉誠出版、二〇〇六・一一、167頁)
- (26) 菊竹清訓「住宅産業は市民の環境をつくりうるか」(『フジスチールデザイン』一九六九・一一↓菊竹清訓『人間の都市』井上書院、一九七〇・九、242-243頁)
- (27) 八東はじめ『メタボリズム・ネクサス』前掲、251頁
- (28) 安部公房『モスクワとニューヨーク』前掲、61頁
- (29) 安部公房・三島由紀夫「二十世紀の文学」(『文芸』河出書房新社、一九六六・二↓『安部公房全集』第20卷新潮社、一九九九・五、55頁)
- (30) 安部公房「隣人を超えるもの」(『現代芸術と伝統』合同出版、一九六六・一二↓『安部公房全集』第20卷、新潮社、一九九九・五、393頁)
- (31) 「隣人共同体」思想を脱却し他人へと向かっていくべきであるという安部の主張は、『孤独な群衆』(前掲、20頁)におけるリースマンの「他人指向型の人間は、コスモポリタンなのだ。伝統指向型の社会にあつては、自分の身近なものと自分のみしらぬものとの間には、はっきりした境界線がひかれていたのであるが、他人指向型の人間にとっては、このような、境界線は存在しない」という指摘と重なる。
- (32) 黒川紀章『ホモ・モーペンス―都市と人間の未来』前掲、108頁
- (33) 安部は「私の創作ノート」(『第二回新潮社文化講演』より、一九六六・四↓『安部公房全集』第20卷、新潮社、一九九九・五、170頁)の中で「隣人意識、我々の中にある郷土的連帯感意識、そういうものをいっぺん壊すこと、だから我々が日本人とか、あるいは日本人としての連帯感と考へられているものに対して徹底的に疑いをはさんで、ばらばらなものにいつぺんなりきること」の必要性を説いている。
- (34) 安部公房・佐々木基一・勅使河原宏「燃えつきた地図」をめぐって(『燃えつきた地図 付録』新潮社、一九六七・九↓『安部公房全集』第21卷、新潮社、一九九六・六、318頁)
- (35) 野村喬「安部公房―『燃えつきた地図』を視座として」(『国文学 解釈と教材の研究』学燈社、一九六九・二、48頁)
- (36) 八東はじめ『メタボリズム・ネクサス』前掲、190-191頁
- (37) 八東はじめ『メタボリズム・ネクサス』前掲、191頁
- (38) 安部公房「国家からの失踪」(『日本読書新聞』一九六七・一一・二〇↓『安部公房全集』第21卷)新潮社、一九九六・六、426頁)
- (39) 八東はじめ『メタボリズム・ネクサス』前掲、232頁
- (40) 千野帽子「誰が少年探偵団を殺そうと。第14回 意外に風俗小説な『燃えつきた地図』」(『ハヤカワミステリマガジン』54(10) 早川書房、二〇〇九・一〇、107-108頁)
- (41) 黒川紀章「多重構造の社会システム」前掲、181頁
- (42) 横文彦「都市と人間」前掲、196頁
- (43) 菊竹清訓「新宿副都心計画のしめすもの」(『社会学工学研究科主催 第三回地域都市開発プロジェクト事例研究会講演』一九六九・八・二〇↓菊竹清訓『人間の都市』井上書院、一九七〇・九、127頁)
- (44) 安部公房「都市について」(『新潮』一九六七・一↓『安部公房全集』第20卷)新潮社、一九九九・五、393頁)
- (45) 安部公房・佐々木基一・勅使河原宏「燃えつきた地図」をめぐって(『燃えつきた地図 付録』前掲、320頁)

- (46) 安部公房・佐々木基一・勅使河原宏「燃えつきた地図をめぐって」(『燃えつきた地図 付録』前掲、319頁)
- (47) 安部公房「国家からの失踪」前掲、428―429頁
- (48) 安部公房「著者の言葉―『燃えつきた地図』」前掲
(ながさわ たくや／神戸大学大学院博士後期課程)